

廃棄物の端布を詰めて…リサイクル土のうの誕生 使用後も乾かして再利用OK 丹波市の縫製会社

2024/10/29 05:30

丹波 経済 防災



廃棄に回っていた端布を中に詰めて作る土のうの試作品と竹内真泰社長。黄色い防水シートとセット販売する予定だ＝丹波市山南町大河



丹波市山南町大河の「タケウチ未来製工」が、服の縫製の課程で生まれる端布を詰めた土のうを開発し、近く自治体や企業に向けた販売に乗り出す。袋の素材に防水性のあるポリエチレンを採用し、水害時にぬれても乾燥させれば再び使用できる。開発を支援した同市商工会は「端布をリサイクルした土のうは全国初ではないか」としている。（那谷享平）

同社は1970年創業の縫製会社。園児用制服や安全ベルトを主力商品として販売している。希望者に無償譲渡する分を除き、年間約2トンの端布を廃棄していた。これを有効利用する方策として選んだのが土のうだった。

耐久性の高いポリエチレン製の袋に芯となる砂袋を入れ、その回りに端布を詰め込む。ボクシングのサンドバッグと似た構造で、1個あた

りの重さは約10キロ。中に水は入らず、繰り返し使えるといい、製造でも使用でも環境負荷の低減につながる土のうをうたう。

適切に管理すれば年単位で使えるだけの耐久力があるとしている。保管時にかぶせて劣化を防ぎ、水害時には止水用の幕になる布も自社で作っている。

専門外の土のうを製造するのは、市商工会経営支援課の多次建策課長のアイデア。以前担当していた豊岡市の土のう製造会社が廃業したため、業務で付き合いのあった同社の竹内真泰社長（51）に、まずは止水用の布の生産を提案した。6月ごろからアイデアを練り、コンサルタントや自治体への聞き取りを経て、土のうそのものの生産を決めた。

商品名は「ミライエ」。試作を終え、11月からの販売を目指して自治体や企業を中心に売り込む。竹内社長は「廃棄物が土のうという形で生まれ変わるとは自分も予想していなかった。品質改善を進め、ぜひ多くの人に使ってもらえる商品にしたい」と意気込む。タケウチ未来製工TEL0795・77・2086